

音楽の神様エルメート・パスコアルを訪ねて～その4～

16. アルバム『調和』のタイトル

1979年にワーナー・パイオニアより発売された *zabumbě-bum-ã* というアルバムは、日本盤では『調和』というタイトルでファンに親しまれている。この原題の *zabumbě-bum-ã* というタイトルを辞典等で調べても意味は出てこない。もちろん、ブラジル人にたずねても判かる者はいないはずだ。なぜなら、これはエルメート本人による造語であるからである。エルメートファンの方の中には、なぜこのアルバムが『調和』というタイトルに置き換えられているのか不思議に思われた方も数多くおられることであろう。今年の春（2008年3月）に渡伯してエルメートと話したときに、彼はこのアルバムタイトルについて私に教えてくれたので、紹介させていただきたいと思う。

このアルバムタイトルは、三つの意味から構成されているとのこと。ブラジル北東部でよく用いられる *zabumba*（ザブンバ）という太鼓、酒に酔った人という意味の *běbado*（ベバド）、酒を飲んだ人が口にする *a*（アー）という声。この三つの言葉をつなぎ合わせて作られたのがこの *zabumbě-bum-ã* というタイトルだそうである。このアルバムの日本盤を発売する際に、日本からエルメートの下にタイトルの説明をしてほしいという日本人女性からの電話（おそらくワーナー・パイオニアの社員の方？）があったようだ。エルメートはこの意味を説明したが、エルメートいわく、彼女はあまり意味を理解したとは思わなかったとのこと。タイトルをいまいち理解できなかった当時のワーナー・パイオニアはそこで苦肉の策として『調和』というタイトルをつけるに至ったのである。

17. エルメートに譜面の読み書きを教えた名ピアニスト、ドン・サルヴァドール

多くのミュージシャンたちから「天才」や「鬼才」と称され、尊敬の眼差しをうけるエルメート・パスコアル。彼の鬼才たる所以は、既成の概念にとらわれない自由な発想に基づく、彼の音楽性にあるのではないだろうか。また、全て独学であらゆる楽器をマスターしていったことも彼の天才ぶりを如実に物語っている。

今では多くの作曲を手がけ、自作の曲を名刺代わりにプレゼントするエルメートであるが、若かりし頃は譜面も読めず、当然のことながら書くこともできなかったそうだ。エルメートに譜面の読み方、書き方を教えたのは、サンパウロ出身の黒人ピアニストのドン・サルヴァドールである。彼はジャズボッサが台頭した1960年代に自己のトリオを率いて一世を風靡した名ピアニスト。1960年代後半にはアメリカに渡り、現在に至るまでアメリカ、ブラジルを中心に活動している。エルメートは、1960年代半ばアイルト・

モレイラ、ウンベルト・クライベールと共にサンブラーザトリオを結成し、ナイトクラブを中心に活動していた。彼らが残した唯一のアルバム *em som maior* の8曲目に *Coalhada* という曲があるが、その曲はエルメートが譜面にした初めての曲だそうで、それを教えてくれたのが何を隠そうドン・サルヴァドールであった。エルメートがメロディーを口ずさんでドン・サルヴァドールが譜面にしてくれた時のことをエルメートは懐かしそうに語ってくれた。以降、エルメートは譜面の読み書きを覚え、今では4000曲を越える楽曲を残している。

エルメートとドン・サルヴァドールのつながりは一般にあまり知られていないが、エルメートの音楽人生を振り返ってみると、ドン・サルヴァドールの存在がいかに大きなものであったことがわかる。エルメートが1970年代に渡米し、アメリカでコンサートを開いた時には先に渡米していたドン・サルヴァドールがエルメートの音楽を聞きに来たそうで、その後も二人の友情は続いているという。

18. エルメートのアメリカでの演奏秘話

エルメートと共演経験の多いアメリカ人ミュージシャンとして挙げられるのがジャズベースの巨匠ロン・カーターである。ブラジル音楽に造詣の深いロンは、ブラジル人ミュージシャンとの録音も多数残しており、自らのアルバムでもブラジル音楽を数多く吹き込んでいる。エルメートが1970年代に渡米した際に、ロン・カーターのライブに飛び入りで参加したことがあるそうだ。その時のメンバーはベースのロン・カーターに加えて、ジャズギターの巨匠ジム・ホール。エルメートはフルートを持って急遽参加したらしい。当時ブラジル音楽といえばボサノヴァがつとに知られていたもので、エルメートに初めて出会ったジム・ホールは、エルメートをボサノヴァミュージシャンと勘違いしたようだ。しかしエルメートの演奏を生で聴き、共演することでエルメートのその類い希な才能に驚嘆し、深く感動したそうである。このトリオでの演奏を見てみたかったと思うのは私だけではないであろう。

19. BEM-TE-VI という小鳥にまつわる話

日本人のブラジルへの移住100周年を記念して2008年6月18日に出版された記念本『愛するブラジル 愛する日本』（金壽堂出版）。この本の付属CDにはエルメートの曲が2曲収録されている。（ちなみに日本のファンへのメッセージがトラック1には収録されている）エルメート・パスコアル、アリーニ・モレーナご夫妻がこの100周年を記念して曲提供を申し出てくれたのがそもそもの始まりであった。彼らの申し出を快くお受けした私は、2008年3月末にエルメートご夫妻の住むブラジルの南部の都市クリチバを訪れた。彼らの自宅を訪れるのはこれで3回目となる。彼らが提供してくれた曲の1つB

EM-T-E-V-Iは、2006年に彼らが出したアルバム **Chimarrão com Rapadura** の18曲目に収録されている美しいバラードである。この曲のタイトルBEM-T-E-V-Iとは、ブラジル全域に生息する小鳥を意味する。鳴き声が“ベン・チ・ヴィ、ベン・チ・ヴィ”と聞こえることからその名がつけられたとされる。エルメートはこの小鳥の名前の由来について、もう1つおもしろいエピソードを語ってくれた。ブラジル北東部に古くからある言い伝えだそうで、昔恋人たちは公に手をつないだり、キスをしたり、抱き合ったりすることが許されなかったそうだ。そのため、彼らは人目のない木陰や野原で手をつないだりしていた。そんな時に、“ベン・チ・ヴィ、ベン・チ・ヴィ（見たわよ、見たわよ！）”と鳴いたのがこの小鳥で、そこからベン・チ・ヴィという名前がつけられたとする説だそうだ。ちなみに、このCDや曲については記念本に詳しく書かれているのでそちらをご覧ください。

20. エルメートご夫妻の夢～偉大な音の寺院 “Templo do Som”

今年の6月で72歳をむかえるエルメート・パスコアルであるが、その音楽活動は現在も衰えることを知らず、今もソロ、妻アリーニ・モレーナとのデュオ、グループなどで国内外を問わず精力的に活動をしている。そんなエルメートご夫妻の夢は **Templo do Som**（音の寺院）を建造することである。様々な音楽家が集い、既成の概念にとらわれない自由な音楽、エルメートのいうところの **Música Universal**（ユニヴァーサルな音楽）を演奏する場でもある。そこではエルメートが様々なワークショップを行い、後進の指導にもあたる。サテライトなどを通じてブラジルにいながらにして、世界中に音楽を発信していくことも視野にいれている。そこでは、音楽だけにとらわれず、舞台や演劇など様々な芸術活動が繰り広げられる。この構想はエルメートが数十年来持ち続けてきたものだそうで、その計画は着実に実行に移されている。必要となってくるのはその寺院の建造資金であるが、目下エルメートご夫妻は世界中に協力を呼びかけている。資金を提供してくれた方にはエルメートの自作の曲が提供され、提供者の名前は寺院の壁に刻まれる予定である。エルメートは、オスカー・ニーマイヤーが作ったような豪華な建築は望んでいない。いたってシンプルで、純粹に音楽ができる殿堂を望んでいる。このエルメートたちの偉大なプロジェクトにあなたも参加しませんか？ご興味のおありの方は直接エルメート夫妻のサイトに是非ともアクセスしていただきたい。

2008年7月25日